

ホー・チ・ミンとスターリン
—ホー・チ・ミン訪ソ（1950年2月）の歴史的意義—

栗原浩英
(アジア・アフリカ言語文化研究所)

**Ho Chi Minh and Stalin:
The Historical Significance of Ho Chi Minh's Visit to the USSR in February 1950**

KURIHARA, Hirohide
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

This paper aims to analyze the historical significance of Ho Chi Minh's first visit to Moscow in February 1950 as the President of the Democratic Republic of Vietnam, especially some factors that motivated him to make a dangerous and long journey to Moscow via Beijing and the content of his dialogue with Stalin, utilizing the recently released archival sources related to Stalin in Russia.

Originally Ho Chi Minh's visit to the USSR was planned to deal with the following matters: 1) the political and military situation in Vietnam and the perspective on the future of the Vietnamese revolution, including the Indochinese Communist Party's (ICP) role there; 2) Soviet support for the ICP and the DRV; and 3) the establishment of diplomatic relations between the USSR and the DRV. During his stay in Beijing at the end of January 1950, however, the third matter was withdrawn because the USSR officially recognized the DRV on 30 January 1950. With the help and arrangement of Liu Shaoqi, Ho Chi Minh departed for Moscow by train on 3 February. He was supposed to have arrived in Moscow on 13 February at the earliest. In Moscow, Ho had talks with Stalin on the above-mentioned matters, presumably accompanied by Mao Zedong, who had also stayed there since December 1949 for the Sino-Soviet treaty negotiations.

In the talks with Ho Chi Minh in Moscow, Stalin basically agreed with Ho's revolutionary strategy and the results gained by his forces, but at the same time demanded the agricultural revolution be implemented, emphasizing the class struggle between peasants and landlords. So why did Stalin refer to the agricultural revolution, the contents of which were completely incompatible with the policy of building a broad national united front adopted by the ICP at that time? On this matter we must note Stalin's own comments (February 1951) to the draft platform

Keywords: communist party, aid, agricultural revolution, diplomacy, national united front

キーワード：共産党，援助，土地革命，外交，民族統一戦線

of the Communist Party of Indonesia (PKI). In fact it was a joint document prepared by the Chinese Communist Party (CCP) and the representatives dispatched from the PKI to Beijing in October 1950. Interestingly Stalin's comments show his disagreement to the formation of "the broadest united front" or the guerrilla warfare strategy pursued by the national liberation army based in the rural areas in Indonesia, most of which clearly originated from Maoist revolutionary strategy. It seems that Stalin never agreed to apply Maoist revolutionary strategy to other communist parties in Asia although he made much of the CCP leaders like Mao Zedong, Liu Shaoqi or Zhou Enlai, and allowed them to support other countries like the DRV or North Korea politically and materially.

On the other hand, after returning to the Viet Bac liberated zone by the beginning of April 1950, Ho Chi Minh was to take a series of actions to realize Stalin's order, including military liberation of the Sino-Vietnamese border area and the "land reform", i.e. the DRV's version of an agricultural revolution, with the help of the Chinese Military Advisory Group.

はじめに

I 失われた絆の回復

II ホー・チ・ミン訪ソをめぐる外形的な問題

1. モスクワに至るまでの旅程
2. 中国共産党指導者との関係について：
北京—モスクワ—北京

III ホー・チ・ミンとスターリンの会談内容

1. 会談におけるスターリンの発言とその
政治的影響
2. スターリンによる土地革命提起の背景
むすびにかえて

はじめに

ホー・チ・ミン (1890?-1969) の生涯において、ソ連は中国と並んで決定的に重要な位置を占めた国家であった。インドシナ共産党の活動家として1920年代から30年代にかけてモスクワに滞在してコミンテルン中枢に勤務した経験をもつホー・チ・ミンであったが、1938年にモスクワを離れた後、ベトナム民主共和国主席 (国家元首) として非公式ながら中国経由で同地を再訪する機会がめぐってきたのは1950年になってからのことであった。その時のホー・チ・ミンとスターリンの会談が結果として二人の最初にして最後の歴史的邂逅となった。

祖国への帰還後、ベトミンを率いて八月革命を実行して、曲がりなりにも1945年9月ベトナム民主共和国独立宣言を行ったものの、直ちにフランスとの戦争に入らなければならなかったホー・チ・ミンにとって1950年は大きな転機を記した年となった。同年1月18日、30日とベトナム民主共和国 (以下、民主共和国と略称) が中国とソ連から相次いで承認を受け、外交関係を樹立したことは、政治・外交・軍事各面における民主共和国の国際的な立場が強化される起点ともなりうる大きな歴史的事件であった¹⁾。それは国際的承認を得ることができないままに、ベトバック (越北) 地方を根拠地としながらフランス植民地主義

1) 中国が他国に先駆けて民主共和国を承認した1月18日は、民主共和国政府により「外交的勝利を記念する日」と定められた (1951年1月15日)。Tin tuc, 15-1-1951.

者と戦う抵抗勢力としての実態しかもっていない民主共和国にとって、国家としての要件を備えるための必要不可欠な第一歩でもあった。また、中国・ソ連に続いて民主共和国が朝鮮（1月31日）、チェコスロヴァキア（2月2日）、ドイツ民主共和国（2月3日）、ルーマニア（2月3日）、ハンガリー（2月3日）、ポーランド（2月4日）、ブルガリア（2月8日）、アルバニア（2月11日）からも承認され、相互に外交関係を樹立したことは、冷戦構造の中で自らが社会主義陣営に帰属することを民主共和国自身が明確に意思表示したという点においても重要であった。

このような民主共和国を取り巻く国際環境の変化の中で、「革命的国際主義の最も有能かつ敬愛する指導者」スターリンと会談することができたのは²⁾、ホー・チ・ミンにとってみれば大きな栄誉と自信の源泉となったことは疑問の余地がない。しかし、その歴史的な重大性にもかかわらず、ホー・チ・ミンの訪ソに関しては従来、資料面での制約から、基本的な事実を把握すること自体著しく困難な状況に置かれてきたため、これを研究対象としてとりあげることはおよそ不可能であった。基本的な事実すら確定しえないという問題に関してみれば、まず訪ソの時期をめぐり、いくつかの異なる言説が流布されてきたことをあげなければならない。ホー・チ・ミンとスターリンの会見の時期に関しては、1949年12月、1950年初頭という二つの言説が存在してきた。1949年12月という説はベトナム共産党の公式な党史において記述されたものであるが³⁾、そのベトナム共産党がドイモイ開始

以降に編纂した『ホー・チ・ミン年表』では、それを1950年2月へと修正している⁴⁾。さらに、中ソ条約締結交渉のためホー・チ・ミンと同時期にモスクワに滞在していた毛沢東や周恩来ら中国共産党の指導者との関係についても、どこまで行動を共にしていたのかが不詳であった。具体的には、ホー・チ・ミンが北京からモスクワへの往復に際して彼らと行動を共にしていたのか、あるいはホー・チ・ミンとスターリンの会談の場に中国共産党指導者も列席していたのかなどの問題である⁵⁾。また、ホー・チ・ミン訪ソの核心ともいえるべきスターリンとの会談の内容に関しても、フルシチョフの回想録がそれに具体的に言及した唯一の文献であるという状況が長く続き⁶⁾、その真偽を検証する術がなかったために、民主共和国とソ連の関係をめぐるホー・チ・ミンとスターリンそれぞれの政治的な思惑を分析することはほとんど不可能のように思われた。

しかし、1990年代以降ホー・チ・ミンの訪ソに関する資料状況にもやや変化の兆しが見えてきた。断片的ではあれ、ベトナム共産党指導者の回想録が出版され、ホー・チ・ミンが当時どのようなことを側近に吐露していたのか、あるいはスターリンとの会談で何が話し合われたのかなどの問題について知ることができるようになった。また、ロシアで公開されたスターリン関連文書の中にホー・チ・ミンの書簡が含まれていたことは、訪ソの時期を確定する上で大きな貢献をするものとなった。本稿はこのような資料状況の変化を受けて、これまで研究対象とされてこなかった

2) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.8.

3) Ban nghien cuu lich su Dang trung uong 1981, tr.596-597. Ban nghien cuu lich su Dang trung uong 1884, tr.610-611. なお、ソ連共産党中央委員会とベトナム共産党中央委員会の共編になる次の文献はドイモイ開始直後に刊行されたものであるが、そこでも、同様な記述が踏襲されている。Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС, Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПВ 1987, с. 189.

4) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.403-408.

5) これに関しては石井明が早くから、言説に差異が存在することを指摘している。石井明 1990, pp. 269-271.

6) Хрущев, Н.С. 1999, с.114-115.

ホー・チ・ミンの訪ソ（1950年）を中心に、民主共和国成立からスターリンの死去までの時期（1945年～1953年）をも視野にいれながら、二人の相互間の認識や民主共和国をとりまく国際環境、とりわけ同国とソ連の政治的な接点を明らかにすることによって、訪ソ前後の歴史過程を再構成し、その歴史的意義を再検討しようとするものである。

I 失われた絆の回復

ホー・チ・ミンは1920年代前半から30年代後半にかけての7年余をグエン・アイ・クオックの名をもって、コミンテルンの活動家としてモスクワで過ごした経験をもつ。そのうち、スターリンがソ連の党と国家の実権を掌握した時期と重なる1930年代のモスクワ滞在は、ホー・チ・ミンにとって心地よいものではなかったと考えられる。彼に対しては若輩のインドシナ出身活動家たちから、ベトナム共産党の結成に際しての行動が独断であるとの非難が寄せられたり、階級対決路線のもとでホー・チ・ミンの思想は度々改良主義的であるとの非難の対象になったりしていた。ハー・フイ・タップが中心となってスターリンにあてた書簡においても、名指しこそされなかったものの、グエン・アイ・クオック起草の文献が非難されていたのである。この時、東方書記局でインドシナを担当していたヴァシーリエヴァの庇護がなければ、その滞在はより辛苦に満ちたものとなったことであろう⁷⁾。

1935年、コミンテルンの機構改革によって地域書記局が廃止された結果、コミンテルンは、旧東方書記局が管轄していたアジア・ア

フリカ地域の情報収集能力を喪失しつつあった。ホー・チ・ミンはこのような状況の中で比較的コミンテルン末期までモスクワに滞在していたインドシナ共産党活動家の一人となっていたが、1938年、モスクワを離れて中国に向かい、延安に到着する。モスクワでは東方勤労者共産主義大学も閉鎖され、そこで最後まで活動していたグエン・カイン・トアンのようなインドシナ共産党の関係者も帰国したことによって、ソ連とインドシナの接点は事実上失われることになった。ホー・チ・ミン自身は、広西や雲南が活動の主たる舞台となり、また土着共産主義者との結合に努める中であってもコミンテルンの活動家であることを忘れてはいなかったが、1943年コミンテルンが解散したことで、もはやソ連とインドシナを結びつける絆は完全に消滅したといつてよいであろう⁸⁾。

ソ連はその後、インドシナに関する情報をほとんど持ち合わせていなかったようである。当時、ソ連にとってインドシナ情報の収集源となっていたのはパリであったが、駐仏大使ボゴモロフの報告（1945年8月20日付）が、インドシナではフランスによる保護は望まれていないと述べたり、インドシナを国連安全保障理事会の保護下におくことを提案したりしているのは、インドシナで抗日闘争を進めてきた運動主体がいかなる政治勢力であるのかが把握されていなかったことをよく示している⁹⁾。また、ホー・チ・ミンがコミンテルンで活動した経歴をもつとはいえ、ソ連におけるその知名度がどれほどのものであったのかも疑問とせざるをえない¹⁰⁾。コミンテルン執行委員会委員をつとめたレ・ホン・フォンやインドシナ共産党書記長となったハー・フ

7) 栗原浩英 1995, pp.63-65.

8) 1935年以降、1943年のコミンテルン解散までのインドシナ共産党の動向については以下を参照。栗原浩英 2000a, pp.99-119.

9) Бухаркин, И.В. 1998, с.126.

10) ホー・チ・ミンはロシア語では Хо Ши Мин と表記するが、1945年段階では Хоцхиминг あるいは Хочимин と表記されており、ソ連にとって未知の人物であったことを示唆している。Бухаркин 1998, с.127.

イ・タップの方が、コミンテルン内のランクとしては上位であったからである。こうした事情を反映してホー・チ・ミンの経歴に関しても十分な情報がなかったものと思われる。コミンフォルム第1回協議会第2回会議（1947年9月23日）において、フランス共産党代表デュクロは、インドシナ情勢に関して「[ラマディエ政府には一筆著注] ホー・チ・ミン（20年間共産主義者であった）を排除して、バオダイ前皇帝を権力に復帰させようという意図がある」と述べているが、当時の国際共産主義運動の指導者ですらホー・チ・ミンについてその程度の知識しか持ち合わせていなかったのである¹¹⁾。

民主共和国独立宣言直後、ホー・チ・ミンはスターリンあてに相継いで書簡（1945年9月22日にモスクワ着）と電報（1945年10月21日付）を送り、インドシナ情勢の重大な変化（バオダイ帝の退位と民主共和国臨時政府の成立）を報告するとともに、飢饉に直面したトンキン人民への支援要請やフランスによる再侵略行動の違法性などを訴えたが、これらに対するソ連側からの回答はないままに終わった¹²⁾。また、民主共和国承認に至る過程で両国の接触に関しては、1947年9月にスイスで国内情勢、共産党内情勢、ベトナムにおける戦争に対する国際的反響について両国の使節の間で会談が行なわれたことが唯一確認できるにすぎない¹³⁾。

このようなソ連側の対応の背景には、前述したように情報が決定的に不足し、判断材料が欠如するという状況の中でソ連が慎重な行動をとらざるをえなかったという事情が存在していた。ホー・チ・ミンに限らず、フランスもインドシナに関してはソ連に対するア

ピールを展開していた。フランスの駐ソ大使は1949年、最高会議幹部会議長シュヴェルニクあてに書簡を送り、ベトナムにおけるバオダイを元首とする政府の成立とその合法性を説明している。ソ連政府はこれに対しても回答を示さなかったが、この時の対応に際してグロムイコ第一外務次官がスターリンあてに提出した判断は概ね次のようなものであった。(1) バオダイ政府は実体のない傀儡政権であり、民族解放闘争抑圧のために利用されている。このような状況の下で、ソ連はその「政府」の存在を承認することはできない。(2) ソ連政府はこれまでインドシナにおける事件に対して自らの観点をフランスには表明していない。外務省はフランス政府と現在この問題に関する取り決めを行なう根拠はないものとする。(3) フランスはバオダイ傀儡「政府」を国連に加盟させようとしているが、これに関してみればホー・チ・ミン政府が国連加盟申請にあたって提起した観点の方（1948年11月22日付）がわれわれにより近いものをもっている¹⁴⁾。ここには、当面事態を静観して、バオダイ（フランス）、ホー・チ・ミンいずれの側への加担をも回避しようとするソ連政府内の慎重な観点が明示されているといえる。

さらにより大きな環境として、当時のソ連の対外政策全体において、インドシナ問題は重要度からすれば、決して高位のランキングを付与されていたわけではなかった。民主共和国独立宣言（1945年9月2日）からソ連による民主共和国承認（1950年1月30日）までを範囲として、全連邦共産党政治局会議の議題としてあげられた対外的なテーマのほとんどは、東欧諸国、ドイツ問題、中国などに集

11) Федеральная архивная служба России, Российский центр хранения и изучения документов новейшей истории, Фонд Джанджакомо Фельтринелли 1998, с.99.

12) Бухаркин 1998, с.126-127.

13) РГАСПИ ф.17 оп.128 д.404. “Беседа посланника СССР в Швейцарии с заместителем государственного секретаря при Президентуре Совета Министров Республики Вьетнам о положении в стране и в коммунистической партии, международные отклики на войну во Вьетнаме.”

14) Бухаркин 1998, с.128.

中しており、インドシナに関してはわずか2件、フランス駐ソ大使の書簡(1949年10月21日に議題として上程)と民主共和国との外交関係樹立(1950年1月30日に議題として上程)を数えるにすぎない¹⁵⁾。その意味で、「当時ソ連は内外に急を要する問題を数多く抱えていたため、ベトナム問題はその関心を引くまでに至らなかった」というレ・キム・ハイの指摘はその通りであるが¹⁶⁾、同時にそれはソ連政府の単なる無関心や無策を意味するものではなく、政府内部にインドシナに関する情勢判断が存在していたことも看過されてはならない。

他方、ソ連から民主共和国の承認が得られないという状況に関して、ホー・チ・ミンは民主共和国独立宣言からそう隔たっていないものと推定される時期に周囲に次のように説明していたという。

「今ソ連が私たちを承認する声をあげることができないのは、時期尚早だからだ。私たちはまず自分たちには独立を堅持するに足る力があるということを証明しなければならない。承認した後にこちらが敗北したら、外交面で厄介なことになるだろう。しかし、心の中ではソ連の同志たちは私たちを支持してくれている。私たちは正義の闘争を進め、日ごとに多くの国の支持をかちとっていこう。心配することはない。」¹⁷⁾

ホー・チ・ミン自身もソ連の行動に一定の理解を示すとともに、インドシナ情勢の抱える不確定要素を十分に認識していたことがこの発言からはうかがえる。ただし、民主共和国成立の時期においては、ホー・チ・ミンは特にソ連のみを重視していたわけではなかつ

た。正確に言えば、ソ連は支持を期待された国の一つにしかすぎなかった。民主共和国が孤立無援の中でインドシナに復帰してきたフランス植民地主義者と戦わなければならないという状況の下では、支持者を選び好みしている余裕などなかった。ホー・チ・ミンは1946年1月にソ・米・中三国の国連代表あてに電報を、2月には中・米・ソ・英各国政府あてに親書をそれぞれ送り、民主共和国の承認と国連加盟に対する支持を求めるとともに、フランスの行動を国連でとりあげてほしいと訴えている¹⁸⁾。これらの国々の中でホー・チ・ミンが最も期待を寄せていたのは米国であったと思われる。1944年時点からOSS(米国戦略情報局)要員と接触して、ベトミンへの支援を要請したのみならず、有名な民主共和国独立宣言(1945年9月2日)に米国の独立宣言を引用したのはその熱意が早い段階から生まれていたことを示すものである¹⁹⁾。そして1945年から46年にかけてトルーマン大統領や国務長官にあてて何度も電報や書簡を送り、その中で「フィリピンと同様、私たちの目標は完全独立および米国との完全協力です」とまで述べて、フランスとの闘争に対する理解と支持を求めた²⁰⁾。また駐仏大使アボットとの会談(1946年9月11日)では、米国側の不安を解消するためか、ホー・チ・ミンは自分に共産主義者とのつながりがなく、民主共和国政府内にも共産主義者はいないと事実と反する発言までしている²¹⁾。米国に対する期待は、「常に弱小民族のために自由と独立を擁護してきた民主国家」というホー・チ・ミンの米国に対する評価が示すように²²⁾、そのフランスやオランダに対する反植民地主

15) Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б). Повестки дня заседаний. 1919-1952: Каталог/Т. III. 1940-1952. Москва: РОССПЭН, 2001, с.389-643. Там же, с.612, 614.

16) Le Kim Hai 1999, tr.64.

17) Vu Dinh Huynh 1993.

18) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, tr.154-155, 178-182.

19) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, tr.1. Patti, Archimedes L.A. 1980, pp.53-58.

20) *United States-Vietnam Relations 1945-1967*, Book 1 of 12, c-96, c-97.

21) *Ibid.*, c-103.

22) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995, tr.129-131.

義的な態度から発していた。

しかし、米国がこうしたホー・チ・ミンからのアピールに反応せず、フランスを支持する姿勢を明確にするにつれて、ソ連の重要度が増大していった。1948年8月に開催された第5回中央幹部会議では、ソ連を中心とした「反帝民主陣営」が「反民主帝国主義」よりも強力であるという二陣営対立に基づいた国際情勢認識が示されるとともに、ソ連と「新民主主義諸国」（東欧、北朝鮮、中国の解放区）の成長と前進が高く評価された。そしてその中で「インドシナ諸民族の国は帝国主義に反対する民主陣営の隊列に身を置く」ことが明言されるようになったのである。他方、米国は「帝国主義陣営の筆頭（最も反動的な帝国主義）」と位置づけられ、フランスのベトナムにおける戦争や、オランダのインドネシアにおける戦争を援助しているとして、各地の民族独立運動抑圧に対するその加担が厳しく糾弾された²³⁾。米国に対する評価は1945-46年の時期と比較してほぼ逆転したといえることができる。

民主共和国の承認に慎重な姿勢をとっていたソ連が、その承認に向けて動き出す大きな契機となったのは1949年10月の中華人民共和国の成立および同国の民主共和国承認に向けた国際的努力であった。中華人民共和国成立直後、毛沢東は中ソ条約交渉のため12月16日にモスクワ入りして、2ヵ月にわたりスターリンと会談を重ねることになるが、その過程において「ベトナム、日本、インドなどアジアの兄弟党の状況」も12月時点から話題になりつつあった²⁴⁾。

中国共産党指導者の中には民主共和国のお

かれた困難な状況に理解を示し、「ベトナム人民の抗仏闘争を援助することは、われわれの国際主義的義務だ」とみなす観点や、中国の承認が民主共和国の国際的な承認に道を開くことによって、民主共和国が孤立を打破し、国際的地位を向上させるのにプラスになるとの見解が表れ始めていた²⁵⁾。中国共産党内でも民主共和国に対する支援が具体化する中で外交関係樹立も検討の対象となり、同時期（12月24日）に中国共産党政治局は、フランスが中国を承認する以前に民主共和国と外交関係を樹立した方が「利が多く弊が少ない」という判断を下していた。同じ頃インドシナ共産党中央からはリー・ビク・ソン（リー・バン）とグエン・ドゥク・トゥイが北京に派遣され、中国側に対する諸要望が伝えられた²⁶⁾。このような両党間の協議を経た結果を反映すると考えられる、劉少奇が中国共産党中央のために起草したホー・チ・ミンあての電報（12月28日付）は「ベトナム民主共和国と中華人民共和国の外交関係樹立問題に関して、中国共産党中央は速やかに中越両国の外交関係を樹立するという貴方の提案に同意します。ソ連と新民主主義国家も中越両国の外交関係樹立に続いて、ベトナム民主共和国を承認することが可能となるでしょう。それを実現するために、中国共産党中央はベトナム共産党中央に対してホー・チ・ミン同志がベトナム民主共和国の名においてコミュニケを発して、各国と外交関係を樹立する希望がある旨声明するよう提案します」と述べ、中越両国間の外国関係樹立にとどまらず、民主共和国承認の連鎖を拡大する方策まで提示していた²⁷⁾。

23) *Van kien lich su Dang*, tap IV, tr.100-112.

24) 楊奎松 1999, p.292

25) 羅貴波 1988, p.234 および羅貴波 1995, pp.153-154

26) 羅貴波 1995, pp.153-154

27) 中共中央文獻研究室 1996, p.236。また中国の資料には毛沢東がスターリンに中国が民主共和国承認の準備をしていることを話すと、スターリンはそれに完全に同意して「あなたたちが先にベトナム民主共和国を承認すれば、われわれもそれに続いて承認する。ソ連もベトナムに対して必要な援助を提供することを望んでいる」と述べたとしているものもある（時期は不明、裴堅章 1994, p.32）。もしこれが事実だとすれば、中国共産党中央の決定の背景にはスターリンの意向が反映されていたことになる。

これを受けて1950年1月14日に「ベトナム民主共和国政府は、平等の原則と、ベトナムの領土主権および国家主権を尊重するあらゆる国の政府と外交関係を樹立する用意がある」というホー・チ・ミンの声明が發布され²⁸⁾、1月18日に中国が最初に民主共和国を承認した。この時毛沢東は中国外交部にホー・チ・ミンの声明を「ソ連と新民主主義国家」に送付するよう命じ²⁹⁾、ソ連と東欧諸国による民主共和国の承認に向けて中国が労をとろうとする意志を明確に示した。

ソ連が民主共和国を承認し、外交関係を樹立する旨表明したのは1月30日になってからであった。その際、同日付でソ連外相ヴィシンスキーが民主共和国外相ホアン・ミン・ザムあてに送付した電報では、ソ連の決断は1月14日のホー・チ・ミン声明を受けた結果である点が強調されているが³⁰⁾、それは中国に遅れること12日を経た承認となっただけでなく、中国が成立後比較的早く民主共和国を承認したのと比較しても、民主共和国独立宣言後4年以上を経た承認となっただけ³¹⁾。しかも、ソ連が中国に続いて、民主共和国承認に向けて東欧諸国をまとめようとするなどの国際的な努力を払おうとした形跡を見出すのも困難である³²⁾。

なお、次章で詳述するように、1949年12月

末あるいは1950年1月初頭にホー・チ・ミンはベトバック根拠地を出発して、すでに訪中・訪ソの途上にあった。後に掲げるスターリンの1950年2月1日付の電報において、ソ連の民主共和国承認後もホー・チ・ミンの訪ソの意志に変わりがないのであればそれを歓迎するという主旨のメッセージが述べられていることは³³⁾、少なくともソ連が民主共和国を承認という段階にあつてはホー・チ・ミン訪ソの主たる目的がソ連に対して民主共和国の承認を働きかけることにあつた可能性を強く示唆しているといえよう。しかし、実際には1950年1月30日のソ連の民主共和国承認によって、ホー・チ・ミンにとって訪ソの目的からは民主共和国の承認に関わる問題は除外されることとなったのである。

II ホー・チ・ミン訪ソをめぐる外形的な問題

1. モスクワに至るまでの旅程

冒頭で述べたように、ホー・チ・ミン訪ソの時期に関しては、大きく、1949年12月説（以下12月説と略）と1950年2月説（以下2月説と略）がある。しかし、このうち12月説にはいくつかの点で無理がある。

民主共和国臨時政府で財政相をつとめたレ・ヴァン・ヒエンの日記によると、ホー・

28) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 6, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995, tr.7-8. なお、1950年1月14日の時点で、ホー・チ・ミンはベトバック根拠地を離れ、中越国境地帯のカオバンに向かう途上にあつたものと思われる。劉少奇の電文起草日時とホー・チ・ミン声明とのタイムラグは、民主共和国政府が移動途中のホー・チ・ミンと連絡をとるのに要した時間が反映されたのであろう。

29) 「關於同意与越南政府建立外交關係給劉少奇的電報（一九五〇年一月十七日・十八日）」『建国以来毛沢東文稿』第一冊，北京：中央文献出版社，1987年，238頁。

30) Министерство иностранных дел СССР, Министерство иностранных дел СРВ 1982, с.8.

31) フルシチョフによれば、スターリンはホー・チ・ミンの率いる運動の勝利を確信せず、民主共和国の承認が時期尚早であつたとしばしば語っていたという。Хрушев 1999, с.114. スターリンは民主共和国承認が、西ドイツの再軍備に反対していたフランスとの関係に影響するのを憂慮していたとする見解もある。Qiang Zhai 2000, p.15.

32) ソ連のゾーリン外務次官の日記によると、チェコスロヴァキア駐在大使ラシュトーヴィチは民主共和国承認に関するソ連政府の見解をゾーリンに電話で照会している（1950年1月30日）。このことは民主共和国承認に際して、ソ連が他の社会主義国に対して特にイニシアチブをとっていなかったことを示唆している。Советский фактор в Восточной Европе 1944-1953, Т.2, Москва: РОССПЭН, 2002, с.254-255.

33) РГАСПИ Ф.558 оп.11 д.295 л.1.

チ・ミンは1949年12月16～18日の政府会議を主催した後、19日の抗戦記念日の記述を最後に姿を消している³⁴⁾。当時は戦争の中で、フランスの攻撃を避けるため民主共和国政府や共産党、軍の中枢機関はベトバック根拠地のタンチャオ（トゥエンクアン省）を中心に180 kmの範囲内を1ヵ月～3ヵ月毎に移動しながら、分散して設営されるという状況にあった³⁵⁾。ホー・チ・ミンにとっては、ベトバック根拠地から徒歩で中越国境まで到達した後、中国経由でモスクワに行く以外にはルートを選択肢はなかった。しかも根拠地から中越国境まで徒歩でフランスの目を避けながら17日を要したという当時の移動事情を考慮すると³⁶⁾、1949年12月末にモスクワでスターリンと会うことはほとんど不可能となる。

さらに、12月説を覆す決定的な証左として、ここで二つの資料をあげておく。その一つは1950年2月1日付のヴィシンスキーの北京駐在ソ連大使シバーエフ宛て電報であり、スターリンの次のメッセージを劉少奇経由でホー・チ・ミンに届けることを命じたものである。

「ホー・チ・ミン同志

数日前、毛沢東同志からあなたがモスクワを秘密裏に訪問したいとお考えもっていることをききました。私はそれに対して、異議を唱えるつもりはないと返答しました。もしあなたが、ソ連のベトナム承認後もモスクワ訪問計画を変更されないのであれば、私はモスクワであなたにお目にかかれるのを楽しみにしています。

フィリップフ³⁷⁾

もう一つは、ホー・チ・ミンが1950年2月7日付でチタからモスクワ訪問に先だってスターリンあてた次の電報である³⁸⁾。

ソ連邦閣僚会議議長スターリン同志

1. 私は二つの理由から、モスクワ訪問が秘密裏に行われることを願っています。第一には、私のベトナムからの出国についてはベトナム共産党中央委員会の数名の委員と、政府閣僚二名しか知っていないからです。第二には、フランス人が私のベトナム出国に気づいたら、政治的・軍事的行動に出るのではないかと考えるからです。
2. 2月3日に私は無線で私のモスクワ訪問の性格に関してベトナム共産党中央委員会の見解を照会しました。しかし、回答がモスクワに届くには早くても10日かかります。
3. もしスターリン同志が、私のモスクワ訪問が公式であった方がよいとお考えになるのであれば、私はベトナム共産党中央委員会があなたのご意見に同意するものと確信しています。
4. モスクワ到着の際は、あなたのもとへ直行することをお許しいただきたく願います。

ホー・チ・ミン

1950年2月7日

これら二つの資料は、1950年1月末～2月1日の時点でホー・チ・ミンが北京に滞在していたこと、ならびに同年2月7日の時点ではすでに北京を離れソ連領内に入ってモスクワ訪問の途上にあつたことを示している。おそらく、スターリンからのメッセージを受け

34) Le Van Hien 1995, tr.160.

35) 羅貴波 1995, p.174

36) 中共中央文献研究室 1996, p.241

37) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.1. なお、「フィリップフ」とはスターリンの筆名である。

38) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.2

とった後、2月3日にホー・チ・ミンは「ベトナム共産党」中央委員会に状況を伝えてからモスクワに向けて北京から出発したものと推測される³⁹⁾。したがって、出発は早くても2月3日以降のことになる。これはまた、劉少奇がホー・チ・ミンの要求に従って、2月3日夜モスクワ行きの汽車にホー・チ・ミンを乗車させたとする『劉少奇年譜』の記述が精度の高いものであることの証左ともなるであろう⁴⁰⁾。

こうして、2月3日にホー・チ・ミンは北京を汽車で出発し、ハルビン、満州里経由でソ連領に入り、チタを経てシベリア鉄道でモスクワに向かったことがほぼ確実となる。当時は北京からモスクワまで鉄道で11日を要していることを考慮すれば⁴¹⁾、ホー・チ・ミンは特に支障がなければ2月13日頃にモスクワに到着したものと推測される。その日程はさらに、ホー・チ・ミン訪ソの性格に関する「ベトナム共産党」中央委員会の見解がモスクワに届く時期とも一致する。

また、劉少奇が1月30日に毛沢東あての電報の中で、「彼は〔ホー・チ・ミンを指す一筆者注〕活動を離れてすでに1カ月となりますが、裸足で歩き17日かけて中国国境地帯に入ったのです」と述べていることから判断すると⁴²⁾、ホー・チ・ミンは1949年12月末か1950年1月初頭に根拠地を出発した後、1月中旬後半に中越国境地帯に到達したものと推測される。ホー・チ・ミンの出発日時に関し

ては、レ・ヴァン・ヒエンがその日記の中で1949年12月24日に「ホー主席に指名された特別の派遣団が外国に行く」と記している。それ以降12月29日にかけてレ・ヴァン・ヒエンが財政相として「派遣団」のための路銀作りや外国の首脳に贈るための金貨鑄造に奔走する様子が日記からはよくうかがえる⁴³⁾。さらにその後、ホー・チ・ミンが中越国境地帯に到達した日時については、1月19日にフックホア（カオバン省）から水口（広西龍州県）に入り、人民解放軍龍州分区司令部に宿泊した後、翌20日には自動車で南寧に至り、さらに21日には南寧から来賓へ移動し、北京行きの汽車に乗ったとする『ホー・チ・ミン年表』の記述が説得的であることがわかる⁴⁴⁾。

なお、ここで本論からはややそれるが、12月説に関しても一言しておきたい。12月説はそれが事実であるかどうかということよりも、むしろその政治的な背景を考慮する必要がある。すなわち、12月説が登場したのが1980年代であることと、それが1990年代半ばになって2月説へと書きかえられた点に着目しなければならない。1980年代は、1970年代からのベトナムと中国の対立が継続していた時代であり、ベトナムは自らをソ連陣営（社会主義共同体）に帰属させ、あらゆる面でソ連と密接な関係を築いていた。その裏返しとして、中華人民共和国成立後、30年にわたる中国とベトナムの関係は、中国が絶えずベトナムを抑圧し、様々な陰謀を企図してきたという論

39) ホー・チ・ミンは電報の中で「ベトナム共産党」と表記しているが、この時点では正確にはインドシナ共産党であったはずである。このことはホー・チ・ミンが共産党の実質についてどのように認識をしていたのか、またこの時点ではインドシナ共産党を継承する党の名称が決定していなかった可能性を示しており興味深い。なお、10月14日付のスターリンに宛てた書簡では「ベトナム労働党」の党大会開催について言及しており、新たな党の名称が確定していたことがうかがえる。РГАСПИ ф.558 оп.11 л.295 л.8. また、中国の資料は当時の党名は正式にはインドシナ共産党であるが、ベトナム共産党とよぶのが一般的であったとしている。中共中央文献研究室 1996, p.236

40) 中共中央文献研究室 1996, p.241

41) 石井 1990, pp.248-249, 253~254

42) 中共中央文献研究室 1996, p.241

43) Le Van Hien 1995, tr.162-164. なお、この時点でレ・ヴァン・ヒエンはホー・チ・ミン自身が外国に行くことを知らされていなかった模様である。

44) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.396-399.

調に統一され、いわば黒一色に塗りつぶされていた⁴⁵⁾。ホー・チ・ミンの人生において中国が重要な位置を占めていたことと、ホー・チ・ミンが中国共産党指導者と親密な関係を保持していたことは否定のしようもない事実であるにもかかわらず、この時期に編纂された『ホー・チ・ミン全集』には、中国に言及した著作や演説が掲載されなかったことはよく知られている⁴⁶⁾。

1980年代にベトナム共産党がとっていた親ソ・反中国路線の下では、成立して間もない中国が真っ先に民主共和国を承認し、それから12日も経ってからソ連が漸く承認したという歴然たる事実は、ソ連とベトナムの友好関係を強調しようとするベトナム共産党にとっては、前者の不熱心さをさらけ出すことにつながり、甚だ都合の悪いものであったとしか言いようがない。それを少しでも緩和するためには、1949年12月にホー・チ・ミンがスターリンと会ったという「事件」を捏造して、あたかもそれが民主共和国の国際的な承認に大きく影響することになったかのような印象を醸成する必要があったのであろう。12月説の消滅と2月説の登場は、まさにこのような親ソ・反中路線の基盤が消失する時期とも重なっている。1990年代半ばには、すでにソ連も崩壊し、中越関係が正常化し、ベトナムの外交が全方位的な方向へと移行しつつあった。対外環境の変化に加えて、ベトナム共産党自身がドイモイ政策を実行に移す中で、「事実を直視する」姿勢を打ち出して、歴史的事実に対する従来の隠蔽体質から大きく脱却した

のもこの時期であり、ホー・チ・ミンに関してみれば、死去30周年（1989年）に際してその遺書全文が手書きの草稿とともに公表された他、未公表の著作や演説を収録した『ホー・チ・ミン全集』の新版や極めて詳細な『ホー・チ・ミン年表』（10巻）が相次いで刊行されることとなったのである⁴⁷⁾。

2. 中国共産党指導者との関係について：北京—モスクワ—北京

訪ソに際してのホー・チ・ミンと中国共産党指導者との接触についても、いくつかの異なる言説が存在している。それを整理すると、第一に、ホー・チ・ミンは北京で中国共産党指導者のうち誰と接触したのかという問題がある。これに関しては、①1950年1月北京で周恩来と会った後、共にモスクワに赴いたとする説と⁴⁸⁾、②ホー・チ・ミンが北京に到着した時、周恩来は毛沢東の指示を受けて中ソ条約締結交渉のためすでにモスクワに向けて出発してしまっており（1950年1月10日）、周恩来とは会えなかったとする説である。後者は、ホー・チ・ミンを迎えたのは劉少奇であり、両者がベトナム支援に関する問題を討論したことと、ホー・チ・ミン訪ソの段取りをつけたのが劉少奇であったことを明らかにしている⁴⁹⁾。この他、ホー・チ・ミンが毛沢東と中南海で会見したとする説もあるが⁵⁰⁾、これは前述したように毛沢東が1949年12月から1950年2月までモスクワに滞在していた事実を考慮すれば、およそ検討する価値はないといつてよい。

45) その代表例として以下の文献をあげておく。Ban nghien cuu lich su Dang Trung uong 1979.

46) レ・ズアン書記長時代に編纂が決定され、1980年から89年にかけて出版された『ホー・チ・ミン全集』10巻を参照。Vien Mac-Lenin 1980-1989.

47) *Di chuc cua Chu tich Ho Chi Minh. Ho Chi Minh Toan tap*, (12 tap), Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995-1996.

48) 黄錚 1987, p.125

49) 中共中央文献研究室 1996, p.241. Hoang Van Hoan 1989, tr.327-330.

50) Hoang Van Hoan 1989, tr.328-329. ヴォー・グエン・ザップは1995年刊の回想録の中で、ホー・チ・ミンは中国で初めて毛沢東と会ったと述べているが、1999年刊の別の回想録では、ホー・チ・ミンが北京に到着した時、毛沢東はすでにソ連に赴いてしまっており、両者の出会いはモスクワであったと、前説を修正している。Vo Nguyen Giap 1995, tr.411. Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15.

この問題に関しては②の説が正確であると考えられる。中ソ条約交渉に関する中国側の記録によれば周恩来が1月20日にモスクワに到着していたとしている点とそれを裏付ける資料として、クレムリにあるスターリンの執務室への訪問者リストの中に周恩来の名がある(1月22日・23日)ことからしても、ホー・チ・ミンが2月初めに周恩来と北京から共にモスクワに向かった可能性はありえない⁵¹⁾。さらに、前述したスターリンのホー・チ・ミンにあてたメッセージが劉少奇経由となつている点も、北京では劉少奇がホー・チ・ミンの受入れ責任者となつていた事実をよく示している。周恩来を除外すれば、ホー・チ・ミンの北京からモスクワまでの同行者としては、ホアン・ヴァン・ホアンがチャン・ダン・ニンの名をあげているのが唯一言及した資料となつているにすぎない⁵²⁾。

第二の問題として、ホー・チ・ミンのモスクワ到着後、スターリンと会談した際に毛沢東、周恩来ら中国共産党指導者も同席していたのかという点がある。これに関して、黄錚はモスクワでホー・チ・ミンが毛沢東や周恩来とともに、スターリンと「ベトナム革命に関する重大な問題」を討議したとしている⁵³⁾。また、ヴォー・グエン・ザップも、後述するようにホー・チ・ミンとスターリンの会談の際に毛沢東が同席していたと述べ、毛沢東の発言を紹介している⁵⁴⁾。それに対して、フルシチョフの回想録や『ホー・チ・ミン年表』

は中国共産党指導者の存在については一切言及していない⁵⁵⁾。以上の問題点を解明するに足る決定的な資料はないが、物理的にモスクワに滞在していた中国共産党指導者がホー・チ・ミンと接触することは可能であること、また中国共産党が当時日本・インドネシア・インドシナ各共産党とソ連共産党との事実上の連絡役をつとめていたこと⁵⁶⁾、さらに訪ソに際してホー・チ・ミンが中国共産党に便宜を計ってもらっていること等々を考慮すれば、ホー・チ・ミンが中国共産党指導者とともにスターリンとの会談に臨むことは十分に可能であつたろう。

なお、会談が行なわれた日時や場所も不明であるが、フルシチョフやヴォー・グエン・ザップの回想録では会談が数回に及んだかのような記述がある⁵⁷⁾。1950年2月スターリン執務室への来訪者リストにホー・チ・ミンの名が記載されていないことから判断すれば、会談はスターリンが当時接客に使っていたクンツェヴォの別荘(ダーチャ)で行なわれたものと推測される⁵⁸⁾。伍修権は、2月14日には中国側主催のパーティーが開催され、スターリンと他の指導者が参加し、16日にはソ連政府がクレムリに毛沢東、周恩来、中国代表団全員を招待してパーティーを開いたとし、当時モスクワに滞在していたホー・チ・ミンがパーティーに参加し、そこでスターリンとの間で冗談交じりの会話が交わされたというエピソードを紹介している⁵⁹⁾。伍修権は

51) “Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953”, *Исторический архив*, No.1, 1997 г., с.6-7.

52) Hoang Van Hoan 1989, tr.330. チャン・ダン・ニンはインドシナ共産党中央委員で、フランスや国民党軍からホー・チ・ミンの存在を隠すために外国訪問団の団長をつとめた。Vo Nguyen Giap 1995, tr.409.

53) 黄錚 1987, p.125

54) Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15. なお、ザップはホー・チ・ミンの訪ソ当時、ベトナムに残留していたため、これはホー・チ・ミンから得た情報であろう。

55) Хрущев 1998, с.113-115. Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.403.

56) РГАСПИ, ф.558 оп.11 д.313 л.2, 67-68.

57) Хрущев 1998, с.114. Vo Nguyen Giap 1995, tr.412.

58) “Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953”, с.7-8.

59) 伍修権 1983, p.13

ホー・チ・ミンがどちらのパーティーに参加したのか明示していないが、フルシチョフの回想録と、スターリンとホー・チ・ミンの会話内容およびフルシチョフの出欠状況を照合すると、2月16日であった可能性が高い。

第三には、ホー・チ・ミンの帰途に関する問題をあげなければならない。これをめぐっては、①ホー・チ・ミンは周恩来より先にモスクワを離れて北京に戻ったとする説（2月17日以前）⁶⁰⁾、②2月17日に毛沢東、周恩来が帰国の途に着いた時、ホー・チ・ミンもこれに同行して、シベリア諸都市を友好訪問しながら北京に戻った（3月4日）とする説⁶¹⁾、③モスクワから空路北京に戻ったとする説（期日不明）⁶²⁾、④ホー・チ・ミンはモスクワに滞在して、2月末の時点でも対外活動を継続し、3月上旬北京に戻ったとする説が存在する⁶³⁾。

残念ながら、現時点ではホー・チ・ミン帰国の期日とルートを確認するに足るだけの資料がなく、いずれの説が正しいかを論ずるのは不可能である。しかし、①や②のように、ホー・チ・ミンが2月17日あるいはそれ以前にモスクワを離れたのであれば、前述のチタ発電報との関連からしてモスクワ滞在がほんの数日であったことにもなりかねない。すなわち、ホー・チ・ミンのモスクワ到着が2月13日頃となり、17日にはモスクワを離れたということになるのである。当時ベトナムでは抗仏戦争が進行中という状況の中で、そこから一時的に離脱してモスクワまで到達したホー・チ・ミンにとって、モスクワ滞在を短

くしてシベリア諸都市を2週間もかけて友好訪問することにどれほどの意味があったのか、筆者には強い疑問が残る。それよりは、「ベトナム人民の正義の闘争に対する世界の進歩勢力の同情と支持を獲得すべく」モスクワでフランス共産党の代表や国際組織の代表と接触したという説の方が、当時ホー・チ・ミンの置かれていた状況を考えると、説得的であるように思われる⁶⁴⁾。

ホー・チ・ミンはモスクワから北京に到着して、当地にしばらく滞在した後、3月11日に北京を出発して、ベトナムに向かった。ホー・チ・ミンは帰路、北京出発時点から、沿路日付入りの漢詩を詠みながら、広西へ到着しているため、われわれはそのルートと日程を知ることができる。漢詩の題名と日付は次の通りである。

「離北京」（3月11日）／「過湖北」（3月12日）／「過長沙」（3月13日）／「午過遷江」（3月17日）／「近龍州」（3月19日）⁶⁵⁾

龍州に到着した後、ベトナム領内に入りバツカンに到着したのは4月2日であったとされる⁶⁶⁾。この帰国日程は、ヴォー・グエン・ザップが回想録の中で、ホー・チ・ミンが1950年の初めに「外国」に行き、4月上旬に帰還したと述べているのとほぼ一致しているばかりでなく⁶⁷⁾、前述したレ・ヴァン・ヒエンの日記の中でホー・チ・ミンが長期に及ぶ不在の後に、1950年4月10日の党活動者会議と11～13日の政府会議で再登場を果たすのとも一致している⁶⁸⁾。

60) 黄錚 1987, pp.125-126

61) 伍修権 1983, p.16

62) Hoang Van Hoan 1989, tr.327-330.

63) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.405, 408.

64) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.405.

65) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.408-413. 広西社会科学院 1995, pp.162-164

66) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.417.

67) Vo Nguyen Giap 1995, tr.408-411.

68) Le Van Hien 1995, tr.160-217.

Ⅲ ホー・チ・ミンとスターリンの会談内容

1. 会談におけるスターリンの発言とその政治的影響

ここでは、1950年2月中旬に行なわれたと考えられるホー・チ・ミンとスターリンの会談の内容を、主としてヴォー・グエン・ザップ、トー・ヒュー、フルシチョフの回想録に依拠して再構成することを試みる。これらを総合すると、会談での主要な話題は、ホー・チ・ミンからスターリンへのベトナム情勢に関する報告と革命の展望の説明、ベトナムへの援助物資提供の要請であった。そして、前述したように本来はこれに加えて、ソ連に民主共和国承認を働きかけるという重大な任務があったが、それはソ連が民主共和国を承認したことにより会談の時点では必要のないものとなっていた。

会談に際してホー・チ・ミンがスターリンに八月革命、抗仏戦争を中心にベトナム情勢を報告したところ、それに対してスターリンは同意した上で、ベトナム北西部の山岳地帯を重視してそこを抑えれば、全土で主導権を握れることができるという助言をしたという。しかし、スターリンは他方でベトナムにおける「土地革命」の遅れを批判し、その重要性を力説した。ヴォー・グエン・ザップがホー・チ・ミンの後日談として紹介しているところでは、会談の際スターリンは二つの椅子を指して、ホー・チ・ミンに「こちらの椅子は農民の椅子で、あちらは地主の椅子です。ベトナムの革命家はどちらの椅子に座るつもりなのですか」とたずねたという⁶⁹⁾。農民と地主を鋭く対比させ、地主を否定的に位置づ

けたこの発言は、インドシナ共産党にとってみれば後述する民族統一戦線政策の内容の見直しを迫るものに他ならなかった。また、トー・ヒューがチュオン・チンから伝え聞いた話として紹介するところでは、スターリンはホー・チ・ミンに「同志のベトナムはもともと封建国家、植民地ではありませんか。ベトナム革命は植民地主義と封建地主に反対しなければなりません。革命と抗戦を遂行したといっても、思想と習慣はそう早く解決できるものではありません」と語ったとされる⁷⁰⁾。スターリンがここでなぜ土地改革や階級対決的なアプローチを提起したのか、その要因に関しては次節であらためて考察することとしたい。

土地革命を促す一方で、スターリンは、ベトナムに自らは深入りせず、実際の支援は中国に任せようとする姿勢も見せていた。トー・ヒューによれば、スターリンの発言はさらに「ソ連はベトナムから遠く、中国ほど近くはありません。ですから同志は毛沢東の経験をたずね、中国の同志に武器、食糧、薬品さらには政治思想に関する支援増大を要請した方がよいでしょう」、「いずれにしてもソ連は国土を再建し、自陣営の社会主義の勝利を保障し、世界革命の拠り所となるために平和を必要としています」と続く⁷¹⁾。

また、ヴォー・グエン・ザップによれば、ホー・チ・ミンとスターリンの会談時には毛沢東も同席しており、三者の間で次のようなやりとりがあったという。ホー・チ・ミンがソ連側に対して、10個歩兵師団と1個高射砲連隊への各種装備提供を要請すると、スターリンは「ベトナムの要求は大きなものではあ

69) Vo Nguyen Giap 1995, tr.411-412.

70) To Huu 2000, tr.268-269.

71) To Huu 2000, tr.269. ホー・チ・ミン以下、当時のインドシナ共産党の指導者たちにとっては、スターリンがベトナムに関する一定の情報を持ち合わせていたことが驚きであったようである。これに関しては、前述したように、スターリンが毛沢東や劉少奇を通じてホー・チ・ミンと連絡をとっていることや、後述するようにインドネシア共産党に関しても劉少奇がスターリンと同党の仲介的な役割を果たしていることからして、中国共産党指導者が大きな役割を果たしていたのは明らかである。

りません。ですから、中国とソ連の間で分担をすればよいでしょう。ソ連は現在東欧諸国の面倒を見るので手一杯です。中国がベトナムの必要としているものを援助するでしょう。中国にないものについては、ソ連の対中援助物資を転用すればよい。その分はソ連が穴埋めをしましょう」と答えた。毛沢東からはさらに「ベトナムは10個師団を装備してフランスと戦わなければならない。まずは北部 [ベトナム—筆者注] で活動している6個師団の装備から始めましょう。ベトナムは直ちにいくつかの部隊を中国に派遣して武器を受け取ってかまいません。広西省がベトナムの直接的な後方となるでしょう」という発言があった⁷²⁾。

以下、スターリン発言のいくつかの論点に従って、そのインドシナ共産党への政治的な影響について考察していく。第一に、スターリンが会談の中で「土地革命」の重要性に言及して、ホー・チ・ミンに対する圧力ともとれる発言をしている点に注目したい。ホー・チ・ミンが帰国後、「われわれが土地革命を遂行しなければならない時がきた。中国は大衆動員と土地改革の実行に関する経験を提供してわれわれを援助することを約束している」と語ったことは⁷³⁾、ホー・チ・ミンがスターリンの発言をいかに重く受け止めていたかをよく示している。同様にその発言に触発されて「思想工作」すなわち整党に向けた準備と研究も開始された⁷⁴⁾。ただし、それで直ちに土地改革が開始されたわけではなく、ホー・チ・ミンが語った通りの内容をもって土地改革が開始されるまでには、さらに約3年を要することになる。1950年時点で共産党は土地政策として租税・利息減額を実施した

り、フランス人や「越奸」の土地を没収して農民に一時的に分与したりするのが精一杯であった⁷⁵⁾。「土地政策の第一段階」と位置づけられたこれらの施策の意義は「封建的搾取の残滓を徐々に廃絶し、貧しい耕作者に生産手段を与え、耕作技術を改善し、生産の増強をはかり、抗戦の需要に十分こたえる」と説明され、階級闘争よりはむしろ抗戦遂行との関連に重点がおかれていた(1950年5月)⁷⁶⁾。これは、党が当時、階級を超えた愛国的な統一戦線を重視する路線をとり、地主全般を否定するような政策をとっていなかったことにも起因していた。地主階級を廃絶する一種の社会革命として1953年に土地改革が開始されるまでには、政治・軍事情勢の安定、フランス人と「越奸」の土地の一時的分与を通じた指導部と大衆双方の経験の蓄積、整党を通じた「幹部・党員のプロレタリア階級としての立場の強化」(1952年)といったステップを経なければならなかったのである⁷⁷⁾。そして後述する1952年11月19日のスターリンにあてたメッセージの中でホー・チ・ミンが「農業プログラム」の実現、すなわち土地改革に努力するという決意を表明していることは⁷⁸⁾、この段階においても訪ソ時のスターリンの土地革命に関する発言が忘れられていなかったことを示している。

第二に、民主共和国に対する支援は専ら中国に任せ、ソ連はそこに深入りすることを避けようとしたスターリンの言動はインドシナ共産党指導部にはどのように受け止められたのであろうか。民主共和国に対するスターリンの消極的な姿勢は、会談後にソ連から援助として民主共和国に提供されたのが、1個連隊用の37 mm高射砲、モロトフ工場製輸送

72) Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15.

73) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412.

74) To Huu 2000, tr.269-271.

75) Vien Kinh te1968, tr.68.

76) Dang Lao dong Viet Nam, Ban chap hanh Dang bo Khu tu tri Viet Bac 1971, tr.153.

77) Dang Lao dong Viet Nam, Ban chap hanh Dang bo Khu tu tri Viet Bac 1971, tr.87.

78) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.19.

車両数台、軍用薬品というごく象徴的なものでしかなかった点に早くも示されていた⁷⁹⁾。フルシチョフによれば、ホー・チ・ミンが帰国後、マラリア治療用にキニーネを提供してほしいと要請した際、ソ連にキニーネ生産設備があるにもかかわらずスターリンは0.5トンのみ送るよう指示したという。フルシチョフは0.5トンのキニーネが「ホー・チ・ミンが共産主義の事業全体のために闘争で支払った」代価として見合うものかという疑問を投げかけている⁸⁰⁾。この他、外交関係樹立のシンボルともいうべき大使任命に関しても、民主共和国のソ連駐在大使としてグエン・ルオン・バンが1950年12月に着任したものの、ソ連の民主共和国駐在大使任命は「ベトナム政府に恒常的な居住地がない」という理由で見送られ、初代大使ラブリショフが着任したのはジュネーブ協定調印後の1954年11月のことであった⁸¹⁾。

他方、中国はスターリンや毛沢東の発言に忠実に沿う形で、民主共和国に対する支援を具体化させていった。その皮切りとして、1950年3月上旬には民主共和国駐在の中国共産党中央連絡代表として派遣された羅貴波がベトナム根拠地に到着した。同年4月にはベトナム人民軍308師団所属2個連隊と312師団所属1個連隊がそれぞれ蒙自（雲南）と化峒（広西）に派遣され、中国側から武器の供与と軍事技術の講習を受けた⁸²⁾。同年8月にはベトナム側の要請に応じて中国からベトナム支援顧問団が組織・派遣されるとともに、羅貴波がその団長に任命された。軍事支援にとどまらず、インドシナ共産党幹部の養成も

1950年から中国の高級党学校で行われるようになった他、広西の桂林にはベトナム人子弟の教育のための学校も開設され、卒業者の大半は管理、財政、銀行、貿易などの実務的分野で幹部となったといわれる⁸³⁾。中越両国は軍事面のみならず、人材面でも関係を緊密化させていったのである。

このような情勢の中、1950年5月から10月にかけて人民軍の攻勢下に展開された国境作戦（レ・ホン・フォン作戦）で、フランスはカオバン、ドンケー、タットケーなど中越国境地帯の要衝から退却せざるをえなくなった。この事件は、第一次インドシナ戦争の流れを変えた転換点のひとつとなるものであった。ホー・チ・ミンは1950年10月14日付でカオバンから発信されたスターリンあて書簡の中で、「あなたと中国共産党からの大きな支援のおかげで、私たちの国境反攻作戦の第一段階は成功裏に終了しました」と述べ、具体的に戦果を報告するとともに、中国人顧問の献身的な活動を賞賛している⁸⁴⁾。ホー・チ・ミンはさらに新たな戦闘を準備し、そこで一層の戦果をあげることをスターリンに誓っている。この書簡は、ホー・チ・ミン訪ソ後の民主共和国をめぐる政治・軍事情勢が、先に指摘したソ連の消極的な姿勢にもかかわらず、中越両国を基軸として展開されたかのように分析されるべきものではないことを示している点で重要である。「私たちの勝利は比較的小さなものかもしれませんが、そのことがあなたを最も有能かつ敬愛する指導者とする革命的国際主義の勝利の一部とみなすことは適切でしょうか」⁸⁵⁾というホー・チ・ミンのスター

79) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412-413.

80) Хрущев 1998, с.114-115.

81) Бухаркин 1998, с.128-129.

82) Vo Nguyen Giap 1999, tr.15-16. 雲南には1950年4月のベトナム側の要請によりベトナムの軍人を校長とするベトナム軍官学校が開設された（羅貴波 1988, p.241）。

83) 羅貴波 1988, pp.238-241. なお、羅貴波は1954年初代の民主共和国駐在大使に任命されることになる。

84) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.7-8.

85) Там же, л.8.

リンに対する問いかけからは中越両党の上に君臨するスターリンのイメージが鮮明に伝わってくる。

ホー・チ・ミンがスターリンに敬慕を寄せていたのとは対照的に、フルシチョフによればスターリンはホー・チ・ミンの勝利を信ぜず、むしろ侮蔑的な態度をとっていたとされる。例えば、ソ連公式訪問の可能性に未練を残していたホー・チ・ミンに対して、スターリンが後に粗暴な言辞を吐露したというエピソードや、ホー・チ・ミンに請われて自らサインした画報をチェキースト（秘密警察）に命じてホー・チ・ミンの宿泊先から奪い返したという冷酷なエピソードがある⁸⁶⁾。後者に関しては、ホー・チ・ミン自身もスターリンのサインした画報が消失したという事実を、帰国後特に批評することもなく周囲に漏らしている⁸⁷⁾。

フルシチョフが言及している以外にも、確かにわれわれはスターリンのホー・チ・ミンに対する冷淡な対応をいくつか看取することができる。前述した1950年10月14日付書簡の中で、ホー・チ・ミンが「私はあなたが私たちのために特に書くことを約束された本を手にするを願っています。私はそれを自分で翻訳するつもりです。それは私たちの若い党にとって最も高貴な贈り物となるでしょう⁸⁸⁾と述べていることから、モスクワでの会談中ホー・チ・ミンはベトナムの党のために特に著作を書き下ろすようスターリンに懇願し、スターリンもそれに対して口約束をしたものと思われる。しかし、それが実現されることは遂になかった。

そして時期的にはやや後になるが、1952年

にはいるとホー・チ・ミンがスターリンと再会する機会がめぐってきた。同年10月5日から開催される全連邦共産党第19回党大会に参加するため、ホー・チ・ミンは再び秘密裏にモスクワ訪問の途につくことになった。モスクワ滞在中、ホー・チ・ミンはスターリンと会談したいという強い要望を表明している。10月17日付のスターリンあてのメッセージは、ベトナム問題に関する報告をスターリンの前で行いたいこと、そして同じくモスクワに滞在中であった劉少奇にも参加を要請して意思疎通の便宜をはかってもらおうという内容のものである⁸⁹⁾。しかし、その後1カ月を経てもスターリンからの返答はなく、ホー・チ・ミンがモスクワを離れる日が迫っていた。11月15日付のソ連共産党対外委員会経由でのメッセージで、ホー・チ・ミンはモスクワを離れる前に「数分」でもよいからスターリンと会見したいという希望を再度表明するとともに、もしスターリンが多忙でその時間がなければ、会見を断念してスターリンあてのメモを残していく旨述べている⁹⁰⁾。やはりスターリンからの反応はないまま、遂にホー・チ・ミンは帰国する日を迎えることになる。その時点（11月19日）にあってもホー・チ・ミンは「最愛かつ尊敬するスターリン同志」に「農業プログラムの実現と私たちの愛国的な闘争を前進させるために努力する」ことを誓うとともに、「二、三年後に当地を再訪してあなたに私たちの活動の成果を報告する」ことを希望するというメッセージを残して、帰路に着いた⁹¹⁾。しかし、ホー・チ・ミンの願いも空しく、1953年3月スターリンの死去によって二人が再会する機会は永遠に失われる

86) Хрущев 1998, с.114.

87) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412-413. ザップはこの問題に関して、「ソ連はベトナム民主共和国を承認したが、われわれとの密接な関係をどれだけ公表すべきか勸案していたのかもしれない」と述べている。

88) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.8.

89) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.15.

90) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.16.

91) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.19.

ことになった。

この時期には健康状態が悪化していたとも伝えられるスターリンだが、人と面会できないような状態にあったわけではなかった。10月20日、24日、27日、31日、11月3日、5日、10日、13日、14日にクレムリの執務室で、マレンコフ、カガノーヴィチ、ベリヤ、フルシチョフらの腹心と会っている。そのうち10月24日には劉少奇、陳雲、王稼祥、師哲ら中国共産党の要人を迎えており⁹²⁾、これが党大会後外国からの共産党指導者と面会した唯一の記録として残されている。ここからあらためて、スターリンが中国共産党に関する限り、これを重視していたことがわかる。

その反面ベトナムを含め、中国共産党以外のアジアの共産党に対するスターリンの態度がいかなるものであったのかは、全連邦共産党第19回党大会に先立つ時点で早くも表明されていた。1952年8～9月にモスクワを訪問した周恩来によって、第19回党大会に際してインドネシア、ベトナム、日本などアジア諸国の共産党代表にソ連・中国両党の指導者と党情勢に関して話し合いをもちたいという意向があることがスターリンには伝えられていた(9月18日)。しかし、スターリンは周恩来に「兄は弟からの申し出を拒絶するわけにはいきませんが、それに関しては劉少奇と相談しなければなりません」と述べて即答を避けようとした。劉少奇には「多くの経験がある」というのがその理由だったが、劉少奇自身が資料を携えてモスクワで一連の問題を討議する予定だという周恩来の説明を受けて、「中国の同志がこれらの問題を討論したいというのなら、もちろん私たちの側に異論はありません。もし[討論を一筆者注]お望みでなければ、話し合うまでもありません」と素っ気のない返答をするのがやっとだった。最

終的には周恩来の懇願に対して「時間は何とかなるでしょう」と述べるにとどまった⁹³⁾。すでにこの時点で早くもアジア諸国の共産党との会談に消極的なスターリンの姿勢を垣間見ることができる。

2. スターリンによる土地革命提起の背景

前節で考察したホー・チ・ミンとスターリンの会談およびそれ以後のスターリンの行動から、土地革命の重要性を説きながら、政治・軍事面での実際の支援や指導は中国に任せて自らは積極的な関与を控えようとする、ベトナムに対するスターリンのアプローチにみられるいくつかの特徴を指摘することができる。ここでは特にスターリンがこの時期に土地革命に言及した要因について考察していく。スターリンはかつてコミンテルンの人民戦線戦術を是認したことからもわかるように、歴史的にみれば必ずしも階級対決路線に固執してきた人物ではない。それがなぜホー・チ・ミンとの会談でわざわざ土地革命を提起したのであろうか。

この問題に関するスターリン本人の見解を知るうえで極めて重要な文献は、ホー・チ・ミンの訪ソから時期的には1年ほど後になる、1951年2月に作成されたインドネシア共産党綱領草案(以下草案と略)に対するスターリンのコメントである。草案はもともと北京に派遣されたコンド(ムリオノ)をはじめとするインドネシア共産党臨時中央委員会代表メンバーが、中国共産党中央委員会と共同で作成したもので、1950年10月11日付で劉少奇からスターリンの意見を求めるべくローシン大使に手渡されている⁹⁴⁾。これを受け取ったスターリンは、インドネシア経済に関する基本的なデータが手元にないためコメントすることは不可能であるとして劉少奇に必要なデー

92) Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина, *Исторический архив*, No.1/1997 г., с.32-33. スターリンの健康状態に関しては以下を参照。Медведев, Ж.А., Медведев, Р.А.2002, с.13-15.

93) Ледовский, А.М.1999, с.172-173.

94) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.2.

タをあらためて送付するよう要求した（10月25日付）。スターリンが要求したのは①交通運輸部門を含めインドネシアの産業で発展している部門はどこか／各部門の労働者の数と全産業における労働者の数／全人口に占める労働者の割合②耕作地・非耕作地の面積とその内訳（地主，国家，外国人，農民ごとに）／全人口に占める農民の割合③小土地所有農民あるいは土地なし農民の数／彼らは誰の土地をどのような条件で耕作しているのか④雇農の有無とその社会階層に関するデータであった⁹⁵⁾。

その後、劉少奇からデータを受け取ったスターリンは、それを分析したうえでコメント（1951年2月2日付）を劉少奇あてに送っているが、その自筆草稿は6ページにも及ぶものとなっている⁹⁶⁾。ホー・チ・ミンに対するスターリンの冷淡な対応と比較すると、それまでほとんど知識すらなかったインドネシアに対するその反応が並みのものではなく、大変な熱の入れ様であったことがうかがえる。一体、草案の何がここまでスターリンの関心を引きつけたのであろうか。コメント全体を通じて、スターリンは封建的土地所有の廃絶を伴った土地革命など階級闘争・階級対決を重視する立場や、ポリシェヴィキの前衛党としての組織原則に基づいた行動スタイルと政策決定方法の実践などを提起することによって草案に盛り込まれていた革命戦略を批判している⁹⁷⁾。しかし、ここでわれわれはこの批判がインドネシア共産党にのみ向けられたものではないという点を想起しなければならない。前述したように、草案自体が「中国革命の勝利の経験を研究した後、われわれはイン

ドネシア共産党中央委員会に以下の提案を行う—インドネシア共産党は全世界の共産主義軍の勇敢な一部隊である⁹⁸⁾という一節から始まるように、それが中国共産党とインドネシア共産党の共同作成になるという点にあらためて着目しなければならない。それに対する批判的なコメントは中国共産党の路線に対する批判という意味をもつと考えられるからである。特に次の二点は、1949年11月に劉少奇によって「毛沢東の道」として提起された中国革命の戦略・戦術を機械的に他地域へ適用することの有効性を問い、異議を唱えたものにとらえられる⁹⁹⁾。

第一には民族統一戦線の位置付けに関する問題である。草案では「毛沢東の道」における「広範な全民族的統一戦線」とほぼ重なる「最も広範な統一戦線結成、インドネシア人民の真の独立と独立・自由・統一のインドネシア共和国建設のための不屈の闘争」や「労働者と農民の同盟に基礎をおき、労働者階級により指導される、国内のあらゆる民族、小ブルジョアジー、民族ブルジョアジー、すべての愛国的政党と集団、愛国分子を糾合した民族統一戦線」結成の必要性が提起されていた¹⁰⁰⁾。これに対しスターリンは民族統一戦線の必要性を認めながらも、インドネシア共産党の差し迫った基本的課題はそのような広範な民族統一戦線の結成ではなく、「封建的土地所有の廃絶と土地の農民への譲渡である」と述べて、「インドネシアで重要なことは農民を活気づかせて、立ち上がらせることだ」として「土地革命」遂行の重要性を強調した¹⁰¹⁾。草案で「インドネシアからオランダ、アメリカ、イギリス帝国主義勢力すべて

95) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.13-14.

96) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.51-56, 57-62.

97) Там же, л.55-56.

98) Там же, л.2.

99) 「毛沢東の道」の内容に関しては“Речь Лю Шао-ци на конференции профсоюзов стран Азии и Оксании”, *Правда*, 4 января 1950 г. を参照。

100) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.5-6.

101) Там же, л.51.

を駆逐する」ことが民族統一戦線の課題の一つとしてあげられていた点に対しても、スターリンは民族統一戦線の矛先をすべての外国帝国主義者に向けるのではなく、「オランダ帝国主義者のみ」に限定し、かつ土地革命と連動させる必要性を指摘している。民族統一戦線の基盤には「労農同盟が存在し、その耐久性は土地革命の進展にかかわっている」というのであった¹⁰²⁾。広範な民族統一戦線の結成を主張する「毛沢東の道」に対して、スターリンは階級を重視した幅の狭い民族統一戦線を対置したといえよう。

第二点は「毛沢東の道」の中核ともいえるべき武装闘争、民族解放軍と根拠地の建設に関する問題である。草案では活動の重心を徐々に農村へとシフトさせ、適切な地域を選択してゲリラ部隊を組織して武装闘争を開始するという、「毛沢東の道」に忠実な戦略がうたわれていた¹⁰³⁾。スターリンは中国の事例からその効用を認めながらも、インドネシアの場合大きな限界が存在するとして、以下の3点を指摘した¹⁰⁴⁾。

- (1) ゲリラ戦法が効果的に適用されるには、鉄道や都市から隔たった一連の森林・山岳地帯をもつ大きな国家の存在が前提となるが、インドネシアではそのような条件は限られている。
- (2) 解放区の役割を考えた場合、島嶼では敵に包囲され、堅固な後方を築くことができない。中国の場合、ソ連が後方として存在したことが有利に作用した。
- (3) 中国共産党にとって有利だったのは、1927年蒋介石と袂を分かった時点ですでに数万人規模の軍隊を保有していたことである。インドネシア共産党にそのような軍隊はない。さらにスターリンは、「ゲリラ戦を都市と工業地帯における労働者階級の革命的行動、

全般的な経済・政治的ストライキで補充し、反動政府の活動を麻痺させ、農村におけるゲリラ戦支持に向けなければならない」と述べ、それが上述の限界からの脱却する唯一の方法であると説いている¹⁰⁵⁾。ここには農村にばかり目を向けて、ゲリラ戦へとはやろうとする戦略に対する厳しい批判が込められているとみられる。

以上二点に象徴されるスターリンの批判的コメントは、中国共産党にアジア地域の共産党に対する支援を任せても、前者の革命路線を普遍化することまでは許容してはいないというスターリンの意志を示した可能性ももっていたと考えられる。おそらく、スターリンからコメントを受け取った、「毛沢東の道」の作者でもある劉少奇は相当困惑したのであろう。コメントを送付してから2カ月が経過しても中国側から何の返答もないのに業を煮やしたスターリンは1951年4月3日付毛沢東あての電報で、劉少奇と中国共産党中央の求めに応じて作成したインドネシア共産党綱領草案に対するコメントの件がその後どうなったのか情報を提供するように要求した¹⁰⁶⁾。劉少奇はこれには直ちに反応し、4月5日付のスターリンあて電報でコメントに対する同意を表明するとともに、コメントをインドネシア共産党に伝えようとしていた矢先、1月6日にインドネシア共産党指導部の交替があったという情報を入手したためにそれを中止せざるを得なくなったと弁明している。劉少奇は同党新中央委員会の状況が不明であり、中国共産党から政治的なアドバイスを受けたいとの意向を表明していないことから、インドネシア共産党中央委員会に対して公式なアドバイスはこちらから持ち出すべき時期ではないと思われること、そして状況が明確になって、インドネシア共産党中央委員会の方から

102) Там же, л.6, 52.

103) Там же, л.10.

104) Там же, л.53-54.

105) Там же, л.54-55.

106) Там же, л.63.

アドバイスを求めたいと言ってきたら、アドバイスをしてはどうかと述べている¹⁰⁷⁾。

このような劉少奇の対応は中国共産党が他の共産党に対して押し付けがましい態度をとらずに、相手の意向を十分に尊重して慎重な対応をしようとしているかのようにもみえる。しかし、より重要なのはスターリンの意向も確認せずに中国側が独自の判断で、「毛沢東の道」を批判したともとれるコメントを他党に送付することを見合わせる決定を下したことである。これに関していえば、毛沢東は1951年4月7日付のスターリンあてメッセージの中で劉少奇よりも単刀直入に「(前略)今はあなたの指示をインドネシア共産党に伝えるのに適した時機ではありません。状況をはっきりさせるためにもう少し待たなければなりません。インドネシア共産党指導部が政治的支援を求めてきたら、私たちはあなたの指示をしかるべき形で伝えます」と断定的な口調で述べている¹⁰⁸⁾。

以上のようなインドネシア共産党綱領草案をめぐる中ソ両党指導者間のやりとりには、尖锐化した形ではないにせよ、後の中ソ対立の萌芽ともいえるべきものが見えているといえるだろう。その意味では、中ソ関係が険悪であった時代(1980年代)に、ポーソフらが「1950年から51年にかけてマオイストはインドネシア共産党とインド共産党に、これらの国々における具体的な状況を無視して、中国における解放運動の経験(農民軍の形成と解放区の建設)をコピーすることを要求した綱領を押し付けようとした。この路線に対して断固として異議を唱えたのがスターリンであった」と指摘していたのは大筋で正鵠を得ていたことになる¹⁰⁹⁾。

コメントはインドネシアの具体的な状況に基づいて戦略を策定することの重要性についてスターリン自身が模範を示した形をとっており、少なくともそこで提起された観点を例えば「毛沢東の道」に対抗して普遍化しようとするといった姿勢はみられない。それをよく示すのは、草案で政治的要求として提起された「ソ連、中国、人民民主主義諸国との同盟、平和と民主主義の陣営擁護、アジアに対する帝国主義の干渉とインドネシアを帝国主義侵略戦争の踏み台へと変えることに反対する闘争」という一節から、「ソ連、中国、人民民主主義諸国との同盟」という部分を「不適切」であるという理由で削除した点や¹¹⁰⁾、前述したように統一戦線の矛先を抽象的な「すべての外国の帝国主義者」に向けるのではなく、「オランダ帝国主義者のみ」に限定するよう指摘した点などである¹¹¹⁾。もともと問題を普遍化するのを嫌い、個別・具体的に把握する傾向のあったスターリンの、一国社会主義論者としての風格がコメントにはよく反映されている¹¹²⁾。

しかし、同時にコメントにはインドネシアのみに範囲を限定して把握することのできない問題も多く含まれている。まず、スターリンがコメント執筆に先立って労働者と農民に関するデータを要求したこと、しかもその中では後者の方に比重を置いた事実は、その一般的な関心が執筆以前、すでに農民に向けられていたことを示すものである。この点が前述したホー・チ・ミンとの会談に際しての発言内容とも一致することは言うまでもない。そしてコメントの冒頭における「インドネシア特有の農業的性格にもかかわらず、他のいくつかの植民地国家よりはるかに工業が発

107) Там же, л.65.

108) Там же, л.66.

109) Борисов О.Б., Колосков Б.Т.1980, с.124.ただし、本書には典拠が明記されていない。またインド共産党に関するスターリンの立場に関する資料は未見。

110) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.6, 52.

111) Там же, 52.

112) 栗原浩英 1998, p.149, 154

展しているという印象を受ける」という指摘や、武装闘争（ゲリラ戦）に関して「中国の経験が示すように、インドネシアのような後進諸国にとっては有効な方法であることも認めなければならない」という指摘は、スターリンがこの時期広く植民地や「後進諸国」に目を向け始めていたことを示す証左と考えられる¹¹³⁾。その意味ではコメントで提示された観点がスターリンの「アジアにおける解放闘争の問題への全般的なアプローチ」を示したものであるとみなすことは十分に可能であろう¹¹⁴⁾。

さらに、インドネシア共産党指導者は今日に至るまで「左翼的な言辞の虜」になっており、「状況をよく理解せずに一撃ですべての問題を解決しようとしている」という同党の「左翼小児病」的傾向に対する批判や、同党がインド共産党のように「取り留めのない議論」をしていると党が潰れると警告したうえで「非合法党にとって簡単に信頼するに足る方法」として提示したポリシェヴィキ的な前衛党の活動方法は、いずれもインドネシア共産党という次元を超える普遍的な党活動原則につながるものである¹¹⁵⁾。

スターリンがコメントに含まれたこれら普遍的な側面を以後どのように発展させようとしていたのか、それは2年後彼の死によって未解明のまま閉ざされてしまうことになるが、少なくともスターリンの植民地に対する関心は、それらの地域における共産党を主体とした民族解放運動の支援には直結しなかったことは確かである。すでに述べたようにスターリンはベトナム革命を直接支援しようとはしなかったし、同様な態度は朝鮮戦争に関しても専ら中国に人的犠牲を強いた点や中国共産党を除くアジア地域の共産党に対する消極的な姿勢に明確に表れていた。スターリン存命

中は、中ソ両党間にインドネシア共産党綱領草案をめぐるような齟齬はあったにせよ、それが表面化することはなかったのは、まさにスターリンが国際政治において「ソ連にグローバルな次元での主導的な役割を確保するとともに、中華人民共和国がアジア地域における国際関係において主要な役割を果たすように中国共産党指導部を奨励」するという分業体制をとったからであろう¹¹⁶⁾。いずれにせよ、アジアや旧植民地に対するスターリンのアプローチはフルシチョフ以降の指導部が中国との国際共産主義運動をめぐるヘゲモニー争いもあって、世界各地の民族解放運動や「社会主義的傾向」をもった政治勢力を自らのグローバルな革命戦略の中に位置付けて直接支援を展開していったのとは大きく様相を異にしている。

むすびにかえて

本稿における論証を通じてホー・チ・ミンのモスクワ到着の時期、ホー・チ・ミンとスターリンの会談の内容、ホー・チ・ミンと中国共産党指導者との関係については、多くの事実を明らかにすることができたといえるだろう。結果的には『劉少奇年譜』や『ホー・チ・ミン年表』など既存の刊行物の記述に大きな誤りがないことを部分的には確認することになったかもしれないが、それを一次資料に依拠して論証した点には意義があると思われる。しかし、同時にホー・チ・ミンのモスクワ滞在期間や北京までの日程、スターリンとの会談が行われた場所や日時など依然として未解明の問題が残っていることも認めなければならない。

また、本稿でとりあげた時期は、民主共和国にとってみれば中国が最大の援助元であり、

113) Там же, л.51, 53.

114) Данилов, А.А., Пыжиков А.В.2001, с.59.

115) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.55-56.

116) Ледовский 1999, с.175.

両国・両党間に密接な関係が築かれつつあったことは言うまでもないが、それは中国と民主共和国の二国間あるいは中国共産党・インドシナ共産党二党間の関係に還元して論じられるべきではなく、あくまでもスターリンによる同意や是認の上に成立していた点が銘記されなければならない。例えば、土地改革の遂行過程で生じた問題に関しては中国の果たした役割のみが強調される傾向があるが¹¹⁷⁾、その起点としてのスターリンの発言がもたらした意義を看過することはできない。そして、中国共産党とインドシナ共産党にとどまらず、インドネシア共産党やインド共産党のケースが示すように、重要な路線問題に関してこれらの党がスターリンの見解や判定を求めたことは、当時の国際共産主義運動に君臨するスターリンの実質的な最高指導者としての地位をよく示している¹¹⁸⁾。またその威厳がいかにかかっていたかは、ホー・チ・ミンとの会談での土地革命に関するスターリンの発言が、その後民主共和国の政治情勢を左右するほどの重みをもってインドシナ共産党の指導部には迎えられたことをみれば十分である。

これとは逆に民主共和国に対する援助や指導は専ら中国に負担させてソ連としては積極的に関与しようとはしなかったり、人間関係においても、スターリンが最後までホー・チ・ミンに冷淡な態度をとり続けたりしたことは事実として残る。しかし、それにもかかわらず、ホー・チ・ミンはスターリンに対して心から敬慕の念を抱いていた。スターリンの死後3年を経た1956年のスターリン批判に関しても、ホー・チ・ミンは「スターリンの

行動に関していえば、その70%は肯定的な性格をもつものであり、30%が誤りであると考えられるにすぎない」とソ連側に語っている(1957年1月)¹¹⁹⁾。ベトナム労働党がスターリン批判の本質的な部分を回避したために、現在のベトナム共産党にとってもスターリンは決して忌避の対象となる歴史的人物の範疇には属していない。皮肉なことにスターリンの冷淡な態度を批判してホー・チ・ミンに理解と尊敬の意を示したフルシチョフに対する評価が今日に至るまで高くないのとは対照的である。スターリン批判を敢行し、民主共和国に対しては本格的な援助の先鞭をつけたフルシチョフだが、彼を失脚に追い込んだブレジネフを中心とするソ連共産党指導部が民主共和国さらにはベトナム社会主義共和国に大口の援助を行ったことからすれば、評価が芳しくないのも当然であろう¹²⁰⁾。

こうした評価の差異に関しては次のような事情も考慮する必要があるだろう。すなわち、スターリンには植民地における革命に対する関心はあっても、そのベトナムやインドネシアに対する認識からは、超大国の要件ともいえるべきグローバルな世界戦略を、この時期まだ持ち合わせていなかったことがわかる。第二次世界大戦終了からスターリン死去までの間に、ソ連の「対外政策の範囲」が拡大して、ソ連が国際政治の舞台に登場したことや、社会主義諸国との関係の原則が構築されたなどソ連の国際的な地位に大きな変化が生じたのは確かであるが¹²¹⁾、そこには中国を除けば、植民地やアジア地域はほとんど包摂されていなかったといえる。まさにスターリンが言っ

117) То Нгу 2000, tr.277.

118) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.312 л.46-56. スターリン本人もそのことを自認していたとみられる点については石井 1990, p.257を参照。

119) Бухаркин 1998, с.132.

120) 詩人でベトナム労働党・共産党中央委員、政治局員を歴任し、スターリンを賛美する詩も残しているトー・ヒューは、フルシチョフが失脚した時、誰もが喜んだと述べている。ただし、トー・ヒューの場合、フルシチョフに対する嫌悪は、政治的な性格のものではなく、会談の場で正面きって揶揄されたという怨念に発するものようである。То Нгу 2000, tr.351-355.

121) Данилов, А.А., Пыжиков, А.В.2001, с.269.

たように、「ソ連はベトナムから遠い」存在にしかすぎなかったのである。スターリンがベトナムに深入りしなかったことも手伝って、ベトナムからみればスターリンは、遠く高い世界にいる無害な存在であったのだろう。

スターリンが土地革命に言及した背景には、中国共産党の革命路線（「毛沢東の道」）の機械的適用に対する異論が存在していたと考えられることは本文で指摘した通りである。インドシナ共産党が、インドネシア共産党綱領草案をめぐるスターリンと劉少奇のやりとりに関する情報を入手したかどうかは不明であるが、スターリンのコメントが作成されたのと同じ1951年2月に開催されたインドシナ共産党第2回党大会では、「毛沢東の道」の受容が公然と宣言され、毛沢東思想にはマルク

ス・レーニン・スターリン主義と並ぶ地位が与えられていた¹²²⁾。このような選択もスターリンが活着している間は、前述した対外政策の下で問題化することはなかった。しかし、スターリンの死後、ソ連が超大国としてグローバルな世界戦略を展開し、民主共和国との関係も密接になるにつれて様々な摩擦も生じることになるのは容易に予見のできたことではなかったろうか。しかも、そこに中ソ対立とベトナム戦争という要因が加わることになる¹²³⁾。いずれにせよ、超大国としてのソ連とそのグローバルな戦略の中に位置づけられた民主共和国との関係の考察はすでに本稿を超える大きな次元の問題であるため、その検討は別稿に譲ることとしたい。

参 考 文 献

《日本語文献》

- 石井 明 1990 『中ソ関係史の研究 1945-1950』東京大学出版会
 栗原浩英 1995 「コミンテルンのベトナム人活動家」『アジア研究』第41巻3号, pp.49-83
 ——— 1998 「コミンテルンと東方・植民地」岩波講座『世界歴史』24, pp.143-162
 ——— 2000a 「コミンテルンとインドシナ共産党—KYTB 留学幹部にみる移動と政治思想の伝播—」宮崎恒二編『東南アジアにおける人の移動と文化の創造』論集I, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.99-119
 ——— 2000b 「ベトナム戦争と中国・ソ連」『アジア研究』第46巻3・4合併号, pp.111-140
 古田元夫 1995 『ベトナムの世界史』東京大学出版会

《中国語文献》

- 広西社会科学院 1995 『胡志明主席与中国』北京：中国大百科全书出版社
 黄 铮 1987 『胡志明与中国』北京：解放军出版社
 『建国以来毛沢東文稿』第一冊, 北京：中央文献出版社, 1987
 羅貴波 1988 「少奇同志派我出使越南」『緬懷劉少奇』（『緬懷劉少奇』編輯組）pp.233-242, 北京：中央文献出版社
 ——— 1995 「歴史的回顧」『開啓國門』（符浩・李同成主編）pp.150-176, 北京：中国華僑出版社
 裴堅章 1994（主編）『中華人民共和國外交史 1949-1956』北京：世界知識出版社
 楊奎松 1999 『毛沢東与莫斯科的恩恩怨怨』南昌：江西人民出版社
 伍修權 1983 『在外交部八年的經歷（1950.1-1958.10）』北京：世界知識出版社
 中共中央文獻研究室 1996（編）『劉少奇年譜』下卷, 北京：中央文獻出版社

《ベトナム語文献》

- Ban nghiên cứu lịch sử Đảng Trung ương. 1979. *Năm mươi năm hoạt động của Đảng Công sản Việt Nam*. Hà Nội: Nxb Su that.

122) 古田元夫 1995, pp.154-157

123) ベトナム戦争中、ベトナム労働党とソ連・中国の間にどのような問題が存在したのかについては以下を参照。栗原浩英 2000b, pp.111-140

- . 1981. *Lịch sử Đảng Cộng sản Việt Nam (So thao)*, tap I. Ha Noi: Nxb Su that.
- . 1984. *Lịch sử Đảng Cộng sản Việt Nam (So thao)*, tap I. Ha Noi: Nxb Su that.
- “Chinh phu quyet dinh lay ngay 18-1 lam ngay ky niem thang loi ngoai giao”. *Tin tức*. 15-1-1951.
- Di chúc của Chủ tịch Hồ Chí Minh*. Ha Noi: Ban chấp hành Trung ương Đảng Cộng sản Việt Nam, 1989.
- Dang Lao dong Viet Nam, Ban chấp hành Dang bo Khu tu tri Viet Bac. 1971. *Van Kien*, tap VI, Ban nghiên cứu lịch sử Đảng Khu tu tri Viet Bac.
- Hồ Chí Minh Toàn tập*. (12 tập) Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995-1996.
- , tap 4. Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995.
- , tap 6. Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995.
- Hoang Van Hoan. 1986. *Giot nuoc trong bien ca*. Bac Kinh: Nxb Tin Viet Nam.
- Le Kim Hai. 1999. *Hồ Chí Minh voi quan he ngoai giao Viet-Phap Thoi ky 1945-1946*. Ha Noi: Nxb Dai hoc quoc gia Ha Noi.
- Le Van Hien. 1995. *Nhat ky của một bộ trưởng*, tap II. Da Nang: Nxb Da Nang.
- To Huu. 2000. *Nhò lại một thời*. Ha Noi: Nxb Hoi nha van.
- Van kien lịch sử Đảng*, tap IV. Ha Noi: Truong Nguyen-Ai-Quoc.
- Vien Kinh te. 1968. *Cách mạng ruộng đất ở Việt-nam*. Ha Noi: Nxb Khoa hoc xa hoi.
- Vien Mac-Lenin. 1980-1989. *Hồ Chí Minh Toàn tập*. (10 tập). Ha Noi: Nxb Su that.
- Vien nghiên cứu chủ nghĩa Mac-Lenin và tu tưởng Hồ Chí Minh. 1994. *Hồ Chí Minh Bien nien tieu su*, tap 4, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia.
- Vo Nguyen Giap. 1995. *Chiến đấu trong vòng vây*. Ha Noi: Nxb Quan doi nhan dan.
- . 1999. *Duong toi Dien Bien Phu*. Ha Noi: Nxb Quan doi nhan dan.
- Vu Dinh Huynh. 1993. “Thang Tam co bay”. *Van nghe*, so 36.

《英語文献》

- Patti, Archimedes L.A. 1980. *Why Viet Nam?* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Qiang Zhai. 2000. *China and the Vietnam Wars 1950-1975*. Chapell Hill and London: The University of North Carolina Press.
- United States-Vietnam Relations 1945-1967*. Book 1 of 12. Washington: U.S.Government Printing Office, 1971.

《ロシア語文献》

- Борисов О.Б., Колосков Б.Т. 1980. *Советско-китайские отношения 1945 - 1980*. (Издание третье, дополненное). Москва: Мысль.
- Бухаркин, И.В. 1998. “Кремль и Хо Ши Мин. 1945-1969 гг.” *Новая и новейшая история*, No.3/1998, с.125-140.
- Данилов, А.А., Пыжиков А.В. 2001. *Рождение сверхдержавы: СССР в первые послевоенные годы*. Москва: РОССПЭН.
- Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС, Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПВ. 1987. *Интернациональное сотрудничество КПСС и КПВ*. Москва: Издательство политической литературы.
- Ледовский, А.М. 1999. *СССР и Сталин в судьбах Китая. Документы и свидетельства участника событий: 1937-1952*. Москва: Памятники исторической мысли.
- Медведев, Ж.А., Медведев, Р.А. 2002. *Неизвестный Сталин*. Москва: Издательство «Фолио».
- Министерство иностранных дел СССР, Министерство иностранных дел СРВ. 1982. *Советский Союз-Вьетнам*. Москва: Издательство политической литературы.
- Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б). Повестки дня заседаний. 1919-1952: Каталог/Т.III*. Москва: РОССПЭН, 2001.
- “Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953”. *Исторический архив*, No.1/1997, с.3-39.
- “Речь Лю Шао-ци на конференции профсоюзов стран Азии и Океании”, *Правда*, 4 января 1950 г.
- Советский фактор в Восточной Европе 1944-1953*. Т.2. Москва: РОССПЭН, 2002.
- Федеральная архивная служба России, Российский центр хранения и изучения документов новейшей истории, Фонд Джанджакомо Фельтринелли. 1998. *Совещания Коминформа, 1947, 1948, 1949. Документы и материалы*. Москва: РОССПЭН.
- Хрушев, Н.С. 1999. *Время. Люди. Власть*. (Книга третья). Москва: Московские новости.

《ロシア国立社会政治史文書館 (РГАСПИ) 所蔵資料》

- Фонд 17 опись 128 дело 404: Беседа посланника СССР в Швейцарии с заместителем государственного секретаря при Президентуре Совета Министров Республики Вьетнам о положении в стране и в

коммунистической партии, международные отклики на войну во Вьетнаме.

Фонд 558 опись 11 дело 295: Переписка Сталина И.В. с Хо Ши Мином. 1.02.50-19.11.52

————— 313: Переписка Сталина И.В. с Лю Шао-ци, Мао Це-дуном о политической линии ЦК КП Индонезии, о реорганизации руководства компартии Индонезии. 14.10.50-09.04.51

————— 312: Ответы Сталина И.В. на письма Гоша, информационные материалы о ходе обсуждения ЦК КП Индии проектов Программы компартии и документа о тактике компартии Индии, представленные Внешнеполитической комиссией ЦК ВКП (б).